



女子の名作

はじめに

こどものころから本を読むのが好きでした。

おとなになったら趣味が変わるかとおもっていたけれども実際おとなになってみたところそうでもありませんでした。

本を読むのが好き、といっても古今東西津々浦々の書物に通暁するなどといったものではもちろんなくて、読むものの八割が文学作品、なかでも日本のものがほとんどといったかたよった読書嗜好です。

ついでに言うと読書エッセイというものも好きです。

書評というほどかたくるしいものではなくて、ひとの生活に本がいかにかひつついているかを知ることができるような。

そういうものも好きで、それからもつついでに言うと、女子目線で作品を読んでいくということもとっても好きなのであります。

女子目線。

最近流行りの、というにはけっこうとうがたっちゃってる感じのあれですけども。

とにかくわたしは文学作品が好きで、活字ばなれの時代とは言われているけれどもいろんなひとに自分の好きな本が読まれればいいなとおもっていて、どんな目線で読むにしてもその作品が長く生きていけばいいなとおもっていて、つまりなんというかそういうことです。

ということでぼつぼつ、そういう目線で読んでいるものを紹介してみたいなとおもってこの文章を書きはじめてみました。

よろしければどうぞ、お暇つぶしにでもご覧ください。

何年にもわたって書いているのでテンションが不統一なところはお愛嬌くらいにおもっていただけるとさいわいです。

最初のころとかだいが若い。

わがことながらいたましい。

これからもすこしずつ続けていけたらいいなとおもっております。

末尾になりましたが、すてきな表紙をつけてくださったかがさん、ありがとうございます。

わたしはかがさんの描かれる青少年や女子がとっても好きです。

それではどうぞ、よろしく申し上げます。

東北の少年たちはいかにして友情をはぐくむか

わたくし、昭和初期の小説がだいすきです。

とりわけ、勧善懲悪の少年小説がだいすきです。さらにくわしく述べると、少年たちが弱きをたすけ強きをくじき熱き血潮のおもむくままに善をなしとげるといふ話を、おいおいきみたちはどこまでいくのかね、と半笑いでながめるそぶりをしつつ実はけっこう「わ、わたしもよい人間にならねば！」と感化されるというのがすきです。

ということでこの本を手にとってみた次第。

佐藤紅緑『少年賛歌』。

大正3年に大日本雄弁会（現講談社）より発行されるや大人気となり、現在もなおかつての紅顔なる愛読者たちを中心に愛される雑誌「少年倶楽部」、その昭和4年5月号～5年7月号にかけて連載された少年小説です。

あらすじはこちらのとおり。

雪深き地方の中学校、そこで堅き友情をちかった秀才享二、詩人長田、武道の達人梶原の三少年。

運命にあやつられ、まず長田の妹が東京に就職、享二もまた東京に転学したが、そこで彼は不良少年団と対決する。

梶原が助けに参上！

少年の純情をたからかに歌いあげた青春小説の名作。

（講談社少年倶楽部文庫版『少年

賛歌』作品紹介）

作者佐藤紅緑は詩人・俳人・新聞記者等を経て、大衆小説の黄金期を築いた巨匠とか少年小説の大家とか呼ばれるおかた。明治うまれの硬骨漢。ちょっとまえに読んだ『ああ玉杯に花うけて』がたいそうおもしろく、それこそ読んでいて血わき肉おどる体験をしたので、ならこの『少年賛歌』なるものもよいのではないかなと、それまで存在は知らなかったけどたまたま古本市でみかけたおりに購入。

タイトルからも表紙（雪のなか外套を着た中学生たちにかこまれ敢然と立つ蓑笠の少年、後述しますがこれ梶原だなー？ 主役でもないのに表紙をがつつり担う貫禄、さすが梶原）からもベッタベタの少年小説らしさが滲みでておりたいそう期待はふくらみます。

東北の一地方都市に住む三人の中学生たちのものがたり。

主人公の浅岡享二は眉目秀麗、成績優秀、勤勉実直、清廉潔白、ひとあたりもよく級友みんなから一目おかれている少年。父は土族の出ながら処世のすべを知らず、五十の坂を越えてもヒラの巡査。母をはやくにうしなったため、現在浅岡家は父、享二、姉の豊子の三人暮らし。ちなみにこの姉は女学校で優秀な成績をおさめていたものの弟の進学のため身をひき、家事を一手に引

き受けている。ねえさんはいいのよ、女ですもの、と云いながらそっと目頭をぬぐう姿は星明子もかくやの献身ぶり。もちろんふたりは気高くうつくしい師弟愛をつらぬきます。

そんな享二の親友は、場末の一膳飯屋の息子、まずしく気弱で他人にあなどられやすいたち、けれども詩才はあふれんばかりの長田藤兵衛。ふたりで清くただしく回覧雑誌などつくったりして、昭和初期の学生さんらしい生活を謳歌している。さらには長田の妹・駒ちゃんが、色恋沙汰にはおちいらぬ範疇でもってたいへん愛らしくつつましく享二を慕っている。

なんて完璧な少年小説的設定であろうか。

さて、とある雪の日の朝から物語ははじまります。

東北の冬の朝は寒い。

しかしながら享二少年は家が貧しいため外套が買えない。

心やさしい享二は父や姉が懸命にはたらく姿を慮ると外套がほしいとは言えないのだけでも、級友たちのあたたかそうないでたちを見るとやっぱりなんともいえない気持ちになってしまう。

なので登校するたびに気が重い享二だったが、その日は同級生の梶原十介がいきなり蓑と笠であらわれたことに度肝を抜かれそれどころではなくなってしまう。ちなみに梶原くんは豪農の子で近隣になだたるお金持ち、粗野でいばりんぼうで勉強はからきしだが腕っぷしは校内一との評判。

昭和のはじめとはいえ学生さんの制服はだいたいもう洋装になっていたころあい、梶原の恰好はさすがにまずいだろうということでみな騒然とするのですが、本人はきっぱり、「僕には外套がありません。雪くらいおそれやしませんけども父がこれを着てゆけといいましたから、学校の規律には合いませんが父がふだんに着るものだからぼくも着るのがあたりまえだと思いました。僕は百姓の子です、僕は親よりよいものを着ようとは思いません」と云いはなつ。

毅然とした梶原の態度に、校内一の硬骨漢、山嵐先生は「えらいッ」と感激し、ふだんからあばれ者の梶原をきらっていた享二も「あいつはあんがい美しいものがある、あいつと親密に交際しようかな」と彼を見直すのでありました。

平和だ... だから少年小説ってやめられない。

しかしながら秀才の享二とがき大将の梶原、文武二大巨頭ともいうべきふたりを周囲が放っておくわけがありません。ずるくて卑怯な小才子・馬島の煽動もあり、校内はやがて享二派と梶原派に二分していくことに。そうして弁当事件（梶原が同級生たちの弁当をぜんぶ勝手に食ってあまつさえひとちのおかずをいちいち品評した事件）や赤シャツ事件（梶原が体育の授業中、着替え置き場でみつけたひとさまのシャツをぼろぼろだ一女ものだ一とばかにした事件。そのシャツは長田が妹から借りたものだったんですが享二がそれをかばって自分のものだといひ、そんで、貧乏なんだから女ものを着たってわるいことがあるものか！ と一喝したもんだから梶原くんはたいそうバツがわるくなってしょんぼりしたというおはなし。梶原くんというひとは、悪い子ではないがたぶんちょっとお調子者で思慮がたりない...）を経て、とうとう享二と梶原は校内剣道大会でどちらが強いかわかることになりました。

小柄ながら北辰一刀流の使い手である享二。

流派には属さないが技量は享二に互角、腕力では校内随一の梶原。

大勢は梶原に軍配があがると見ている。享二もまた、「もしも自分が勝ったなら、その結果はどうなるだろうか。武道にかけては校内無敵だとみずからも信じ人もゆるしているかれ十介！もし負けたらどんなに恨むだろう。かれは恨まんでも周囲のものがかれを扇動する。梶原にも味方があればぼくにも味方がある。双方しのぎを削って戦うことは決して学校の名誉ではない」と考え、梶原に勝ちを譲ることにします。なんかちょっとずれてる気がしなくもないが常に上向き固定視線こそ少年小説の主人公の特権。ちなみに享二は善とか義にこだわるあまり実生活ではだいぶ天然気味なのでその後どんな事件に遭遇してもだいたいこんな感じです。

しかしそうしたひとびとの思惑もつゆ知らず、梶原は神聖なる剣道大会の直前というのに酒を飲み歩き「おれのような偉人は学校に行く必要なんかないのだ」とうそぶく。真のひとの道を梶原にわかってもらうためにはどうすればいいか（少年小説の主人公の特権は以下略）、悩んだすえに享二は剣道大会で梶原を倒すことを決意、結果やってのけます。

そして大会の帰り道、仕返しをおそれる長田の制止も聞かず、梶原の待ち受ける校門にやってきた享二。

おまえはおれをどうおもう、と尋ねる梶原にたいして、ばかだと思う、と云いはなちます。さらにつづけて、

「酒を飲むものはばかだよ。あたりまえならぼくはとてもきみにかなわないのだ。それが...今日のざまはなんだ、それできみはばかではないというのか。今日の試合はぼくが勝ったのじゃない、きみが負けたのだ、きみを負かしたのはぼくじゃない、酒だ。きみ、腹がたつか、腹がたつならぼくをなぐれ、なぐられてもぼくは...蹴られても...踏まれても...ぼくはきみを墮落から救いたいのだ」

梶原少年号泣、そして陥落。

ここから梶原は一気に享二への愛につき進んでいきます。文字などだいきらいだというのに長田と享二の回覧雑誌に首をつっこみ、享二のすすめにしたがって酒をやめ、さらに長田をことあるごとにけなしたりおとしめたりしては享二を自分だけのものにしようとする。あらおかしいわねこのお話「堅き友情を誓った三少年」とあったはずなのに、とおもわず作品紹介を確認してしまいました。おとなの強引なまとめなど知ったことではない梶原十介十七歳、青春暴走一直線。そんな激しい求愛にたいし享二からのレスポンスははかばかしくなく、あくまで長田と平等にあつかわれているところも涙をさそう。

それはさておき、剣道大会の興奮もさめやらぬころ、兄の学費をかせぐためお駒ちゃんが東京の紡績工場へと働きに出ることになりました。おって享二も世間勉強をすべく上京することに。家族と親友に見送られ、単身東北をあとにします。

はてさてその後の彼らはどうなるのか。

長くなってきましたので次の章に移ります。

よろしければご覧あれ。

今回は浅岡享二少年の東北で暮らしについて語ってまいりました。

ということで今回は東京編。

道中泥棒のこどもにからまれるなど紆余曲折のはて東京にたどりついた享二。父の旧友である北庭代議士のもとに書生としてはいり、勉学に励むこととなります。ところで北庭先生のお宅の次男坊・勝さんは享二とおないどし、そのため、先生からはお互い好敵手として励むようお達しが下されます。しかしながらなにぶん享二は努力を尊び、慈善を愛し、おまけに清貧を旨につつましく生きている。もちろん居候の身という立場もわすれず、つねに謙虚な態度をくずさない。模範的な優等生。そんなもんが毎日じぶんのそばにいたとして、わたしだったらグレたくなるがもちろん勝さんもグレました。勝さんもそれなりにいいこでかしく、いかにも裕福に育ったぼっちゃんらしい少年なのですが、突然やってきた浅岡とかいうどこの馬の骨かもわからないおないどしの書生が至極まじめに「あなたは天才です、僕は鈍物です、だから僕は人並み以上に努力せなければならんのです」と云いながら猛烈に勉強したりそれにみあう結果をだしたりするせいで... そして北庭先生が「浅岡はいいがうちの息子はだめだ」と世間に吹聴しおかあさんも「うちの息子にはほめるところがない」なんて云うせいで... ぼっちゃんはほんとうに身の置きどころがなくなって家出します。

あたりまえだよな

というつつこみは熱血少年小説にはつうじない。悪いのはあくまでおのれに負けたぼっちゃんです。

享二は「ぼっちゃんを善に導くことができなかった！」と責任を感じ（おまえの責任はそこじゃない）悪の道に堕ちた勝さんを救うため、東京じゅうの不良中学生をたばねている親玉・熊谷と対決することに。

この熊谷というのが、物語最大の敵役というのに十八九のほっそりとした美少年で呼び名は「若さま」もしくは「プリンス」、腹心の部下には若さまより二、三歳上で武術の達人西田というのがいてこれがまた熱烈な崇拜をもって若さまにお仕えしている。もしかしてあばれんぼうと有能インテリ美人という組み合わせがおすきなのかしら佐藤先生という疑惑がここにきて浮上。ちなみに不良少年と聞くとともにはやなんとなく牧歌的な響きさえ感じられる昨今ですが、若さまは中学生にもかかわらず短銃と小刀をつねに携帯し、狡猾に人心につけこみ、いうことを聞かないやつの家には火をつけ家人を襲うというほんものの悪人です。

熊谷と勝さんの策略により、享二は墮落学生の烙印をおされ、同級生から鉄拳制裁にかけられることに。

もちろん冤罪なのですが、真実を告げればこんどはうそをついた勝さんが同級生たちの標的になってしまう。勝さんおよび北庭先生への義理を重んじ、享二は弁解することもなく鉄拳を受ける。

そこにあられたのがわれらが梶原十介！

かれは享二のいないさびしさから、「烏天狗」と名乗って夜な夜な近隣の不良高校生を懲らしてまわっていたのですが、山嵐先生に「一人の敵にあたる剣だけを学ぶのか、喧嘩だけが畢生の目的か、万人の敵を制する道を学ばんのか」と一喝され、ではと万人の敵を学ぶため上京してきたのです。

浅岡家はさんざん金策に奔走してやっと息子を上京させたというのに、何の葛藤もなくあっさり東京にやってきた梶原、すばらしきは大地主の財力。そんな金があるならもったいぶらず外套の一枚くらい買ってやれというつつこみは心の隅に秘めおくべきか。あと上京したその足で宿もきめずに享二のもとにやってきたということからしても梶原の本意は知れようというものだが親御さんはそのあたりご存知なのか。

制裁をうけ半死半生の享二を北庭先生の屋敷まではこんだ梶原。おりしも帰宅した先生に、挨拶するどころか「浅岡には浅岡としての立場があるだろう、踏まれても蹴られてもこの家のことを思わねばならぬ義理があるだろうが、ぼくには義理もへちまもない、ぼくにはただ親友の浅岡があるばかりです。浅岡を侮辱したものは僕の仇です」と勝さんへの復讐をたからかに宣言する。

友をおもふ梶原の心に感激し、ひきくらべておのれの息子はなんとふがないと、勝さんを勘当する北庭先生。あきらかに勝さんは享二のせいで人生くるってきてますがそれはともかく、以来まえにもまして享二愛をつのらせていく梶原。骨の髄までどっぷりです。東北に残してきた長田をおもいだすどころか詩を書くやつは日本の恥だとかことあるごとに云ったりします。長田の唯一の才能なのに！

それにたいし、享二は勝ぼっちゃんを無二の友（ふたつとないを書いて無二！）と呼び、梶原の手からぼっちゃんを守るべく奔走します。いや梶原がなんで怒っているかといえはひとえに享二がぼっちゃんたちにしてやられたからにほかならないんだけど、義に篤いうえに皆から愛されてなんぼの少年小説の主人公はそういうことにはたぶん頓着しない。

すったもんだのあげく、熊谷一派の本拠地に乗りこむ梶原。その憤激はすさまじく、結局享二の制止も聞かず勝ぼっちゃんをたこなぐりにしたうえ享二を連れて北庭先生の家を逐電、放浪の旅にでるのでした。

以上、作品紹介にある範囲内であらすじをざっとお話してみました。伝わるかな... 伝わるかなこの思い...！！

いちいちピックアップしていけばきりがなほど梶原のひとりジェットコースターロマンスがすさまじいです。ほかにも北庭先生と浅岡父のかかわりあいとか、いつのまにか同居している山嵐先生（独身）と長田とか、西田と若さま「たいていの悪事はなしてきた」コンビとか、ただでさえ関係を邪推したくなるうえに実際それとおもわれる描写がすくなからず出てくる組み合わせがめじろおしです。

BL読み替えとかが流行る昨今、この作品を埋もれさせるのは惜しいとおもうのですがいかがで

すか。

すでにわりと埋もれてるけど... 絶版だけど... いやしかし。

このたびは物語の前半のあらすじだけを追ってみました。これからさきも梶原の暴走ぶりと享二の天然ぶりは止まりません。

どうぞ、よろしければお読みに、そしてわたしと語りあってはくれまいか... このもえ、ひとりではかかえきれない。

末尾ながらつけくわえておきますと、この物語、さすがに戦前の作品なので天皇陛下万歳色が強いうえにけっこう身分差別用語も頻繁に登場します。男女差別もわりとあります。そのあたりはみなさまそれぞれご自身の信条に則してご判断ください。

感想というよりレビューというより10分でわかるなんとかみたいになってしまいましたが、それでは今回はこれでおひらき。

恋とはひとだけのものか

まえも書いたとおもうのですがわたしは、世間一般に流布しているビーエルなるものよりもむしろ、そういう考え方がぜんぜんなかったようなころに執筆されたおはなしを読んで、火のないところに煙を幻視するのが、すきです。

というよりもそもそも十代のころたいへん自意識過剰のいきものだったので、本屋さんのビーエルコーナーにたたずむのがとても気恥ずかしかったので、そいでもやっぱりふじょしとかいう単語の範疇にひっからまるいきものでもあったので、殿方同士のなんとやらにはたいそう興味があつた、ので、こうね、国語便覧にあらすじ載ってるやつとかで「これはくさい！」とおもうものをサーチして読んではときめくというのをくりかえしていたのでした。

おかげでいまはたいへん文学の素養があります。うそです。ごめん。てきとうなこと云った。おぼえているのは、たとえば犬坂毛野がだれのために簪を染めたかとかそういうことばかりだ。だけど結局いまでもビーエルはあんまり知らないまいまにいたります。われ泣きぬれてかにとたわむるふがいなさよ。

それはさておき、そういう便覧に載ってるおはなしというのは、作中人物の関係性ももとよりだけどももちろん世間がみとめるだけあつてすごくおもしろい。のだけども、便覧に載ってたつて絶版だとか読めないとかは山のようにあるので、そういう意味でも、たとえどんな方向からでも名作復刻の一助になればいいなあとおもって日夜ひとさまに、これいいよあれいいよと云っている、のもやっぱりうそで、単純におともだちがほしいのである...ほも読みの...。なんかさーだつてさーむかしの小説って主人公が神レベルでなんでもできるうえに美人じゃない...そしてだいたいニヒルな兄貴分的存在があらわれて「義によって助太刀いたす」ってなるじゃない...つまりそういうことです。

という話をしたくてしかたがないので、二回目を書きにきてみました。

よろしければお慰みにごらんください。

今回の議題は巖谷小波先生、「こがね丸」。

便覧に、児童文学のはじめとかなんとか書かれているおはなしです。

岩波文庫とか青空文庫とかで読めます。

ところでわたしはこの話、実際読むまで、少年たちがこがね丸って船で南海の孤島に冒険しに行くはなしだとおもっていたよ...犬だ、こがね丸。犬のなまえだ。

のっけは、こがね丸誕生以前、かれ（犬）（そして雄）の父母の代の因縁が語られます。

以下、冒頭。

「むかし或る深山の奥に、一匹の虎住みけり。幾星霜をや経たりけん、軀尋常の犢よりも大きく、眼は百鍊の鏡を欺き、鬚は一束の針に似て、一度吼ゆれば声山谷を轟かして、梢の鳥も落ちなればかり。」

虎...

いったいいつの時代のおらとこの裏山に虎が出たのかどうかはさておき、この虎金眸が空腹でごろごろしているときに、腰ぎんちゃくの狐が、大王（と呼ばれている）おなかすいてるなら近所にいい獲物があるよ、といって庄屋の家に飼われている犬夫婦・月丸と花瀬の存在を告げることからはじまります。

この狐、じつは庄屋のところでいたずらをしたとき、この犬にしっぽをとられているので復讐したくてたまらない。しかしながら自分の力では太刀打ちできないので、大王におでましを願ったわけです。

よっしゃ、と立ちあがった大王にあわれ月丸は食い殺され、悲嘆に暮れた花瀬は児を産みおとしたのちはかなくなります。いまわのきわ、花瀬は昵懇にしていた雌牛牡丹に（うし...）息子をたのみ、牛乳を呑んで育った児はすくすくどころか通常の犬の何倍もの成長を遂げます。明治時代に牛乳の栄養価を正確に把握されていた巖谷せんせいはずごいとおもう。そういえば前回の「少年賛歌」も主人公たちは話の後半から千葉で牛乳を売りさばくことになるのですが牛乳ってむかしのこども向け小説における絶対的存在なんだろうか。それはさておき。牡丹の薫育を受け、そのうえ牡丹の夫・文角（牛）（しつこいようだが牛）から武術のてほどきを受けたこがね丸は、ある日両親にあらたまって呼びだされます。そのときの様子がこちら。

或時黄金丸を膝近くまねき、さて其方は実の児にあらず、斯様々々云々なりと、一伍一什を語り聞かせば。黄金丸聞きもあへず、初めて知るわが身の素性に、一度は驚き一度は悲しみ、また一度は金眸が非道を、切齒して怒り罵り

気づいてへんかったんかい

とたぶん読者は全員つつこんだにちがいないほど素でおのれの境遇に衝撃をうける黄金丸、天然疑惑が発生。「かかる義理ある中なりとは、今日まで露知ず、真の父君母君と思ひて、我儘気儘に過したる、無礼の罪は幾重にも、許したまへ」とか、いっそきみかわいいな...

ということで実の父母のあだ討ちにでる黄金丸。みずから野良犬の群れへと身を投じるのでした。金眸んちは自分ちからすぐそこなんですけどそのまえにね、武者修行をね、という。

けれどもずっと飼い犬だった黄金丸、処世の術もうまくなく、道中いろいろあるうちに食料もつき、おなかをすかせて山道をふらふらとしていたところ目にうつったのが一団の鬼火。けっこうこういう唐突な超常現象がするっと出てくるところもちょっとじつはツボです。わたしのツボなどどうでもいいですか。そうですか。

ともあれこれは父母のお導きかについていくとそこにはおおきなお寺がありました。

その石畳に一羽の雉がたおれているのをみつけ、これぞ天の救いと飛びつこうとしたところ、突如あらわれた一頭の白犬。かれは黄金丸をぬすつとと断じ、うちかかってきます。丁々発止、たたかううちにやがて白犬が黄金丸にこうべを垂れることに。白犬の名は鷲郎、近辺の獵師に飼

われる猟犬でしたが、そして雉はその主がしとめたものだったのですが、「縦令ひ主命とはいひながら、罪なき禽獣を徒らに傷めんは、快き事にあらず」といって主人のもとから去り、黄金丸とともにあることを誓うのでした。

二匹はこの古寺を住まいとさだめ、義兄弟の契りをむすび、日々むつまじく暮らします。もともと飼い犬でわりと生活能力のひくい黄金丸にかわって「自分、慣れてるので…」と結局むかしとったきねづか、山野で獲物を狩ってはとってくる鷺郎。

黄金丸の帰りがおそいとずっと門のまえで「なにかあったのか…」とそわそわ待ち続ける鷺郎。

おそらくすでに予想はされているでしょうがまあつまりしょうじきな話、ここからは鷺郎のみごとなまでの尽くしっぷりに圧倒されて言葉もでません。しかもやっぱりむかしの少年小説のセオリーなのか、いまいち愛されてることにぴんときてない黄金丸。そりゃ親と自分の種族がちがうことにもぴんときてなかったくらいの天然ものだものね…しかたないか…。ところで天然美人と世話焼き苦勞性男前はわたしの最大のツボです。それがおたがい思い通じあってなかったり双方向片思いだったりすると俄然もえます。どうでもいいですか。ごめん。

ともあれ頼りになる相棒を得て、黄金丸の冒険はなおもつづきます。そして回をおうごとにお話もぶっとぶ一方です。巖谷せんせい、いくらなんでも、鼠に懸想してその夫をころして「あいつがいなくなったから俺と！」と迫る猫とかパンチききすぎてはいないか。これ、おさないひとのためのものがたりって云ってなかったか。

世にあだ討ちものは数あれど、そのなかでもとびぬけてハッピーエンドな結末であるとおもいます。犬だしね…。ハッピーなのはもちろんいろんな意味でです。おもに鷺郎方面で。

というところで今回もお開き。

お読みくださりありがとうございました！

ほかにおどりをしらない（わたしが）

2回めを書いてからかなりの日が経っていますがみなさまお元気でしょうか。

わたしは元気です。

あいかわらず世間一般に流通している本のなかにある意味での火の気を感じとってはムハーとなっています。

います、ので、そんでもってねえなんで世のなかにはこんなトラップがたくさん日常いたるところに落ちとるん...という気持ちになる昨今です。

小説やまんがやそのほかもろもろでも、映画でもドラマでもそのほかもろもろでも、かわいいもかっこいいもみんななんか、なんか、...なんか。あるよね。ところでわたし最近サッカーが超すきなんですがまあなんていうかそういうところできっと汲み取ってくださるかたもきっと。きっといずれかに。すいません。

それはさておきとりあえず、そうした、いわゆる「女子の名作」的な世界はこの世に多々あるとおみうけする次第ですけれども、なかでもわたしの好みはかっこいいでもかわいいでもなく「残念」です。

もういちど云う、残念です。

というのはまえの二回でもすでにばれているかもしれない、ジェットコースターロマンスノンストップ残念、だいすきです。

ということで前ふりも長く参りました。

今回ご紹介いたします名作は、山田耕筰『自伝若き日の狂詩曲』です。

もういちど云う、もういちど云う...山田耕筰。

日本音楽界に多大なる功績をきずかれた、音楽の教科書ではおなじみ、あの、山田せんせいの出生から幼年時代、東京音楽学校そしてベルリン王立音楽院に留学し日本にもどるまでを描いた半生記。

青年山田耕筰の成長を通じ、各界著名人の若き日もあらわれる、すなわち明治期日本文化の黎明を知るにふさわしい資料ともいえましょう。

また山田氏はおさなきときより勤労に励み、敬虔なキリスト教徒の子でもあったことから、明治期の職事情、信仰についてもうかがえます。

そんな日本近代史に燦然と輝く名著『若き日の狂詩曲』。

...さ、もういいか。

というようなと一てもためになるご本ではあるのですが、それにもましてこの本、ぶっちゃけ山田せんせいもててもて半生記。

それはもうちいさなころから山田さんちのぼうやは恋をする恋をされるおもうおもわれる慕う慕われるそれも老若男女問わず！

これもう昨今の草食男子とかいうのの必携の書にしたらええんちゃうかな。

ありえへんくらいもててはるんやけどこっちはないしたらええかな。いやどないもせんでええんやけどな。

と、読みながら遠い目になることしばし。

弟の幼稚園の先生にきゅんとし十になるやならずでともだちの家のおねえさんにてほどきを受け下宿の娘さんに慕われ長じては彼のため命をなげうつ女もありともう挙げてはきりがなくらいのレディキラーヤマダ・コウサク氏、その勇名は女性間のみにとどまらず中学生時分は近隣の男子学生たちから身を守るため義兄から銃の携行を命じられていたということでなんというかなんという、もて王…。

実際のもてもて伝説についてはどうぞみなさまご本を参照なさってください。

こちらのページでは、女子の名作にぜひともカウントしなければという一場面をご紹介しますにとどめます。

わたしはね…これを職場でたまたま手にとって検品のためにぱらぱらめくってそのくだりを目にしてそのまましょうじき硬直したよ…？

ほんとにびっくりしました（真顔）。

という前置きは以上にして、とにもかくにもとりあえず、ロマンスはオペラ座からはじまります。

親しい友人らと観劇におもむいた青年山田は、ふとしたきっかけでドイツ系アメリカ人の紳商と知り合います。

年のころ四十五、六、人品卑しからず、明朗闊達、話術も巧み、しかしながらどこかふしぎな雰囲気のある男。仕事柄諸国を旅し、日本のこともよく知るといふ男と日本の留学生たちとの話ははずむばかり。そうして宴もたけなわとなったころあい、紳士は彼らにある提案をもちかけます。いわく、自分は明朝ラインへの小旅行に出るのだが、ひとりきりではさびしい、ひいてはどなたか同道者になってはくれないか。

どなたかと云いつつ紳士の狙いが山田にあるのは明らか、最後には名指しで懇願され、友人たちの後押しも手伝って青年山田はほとんど見ず知らずの相手との旅行に諾と答えてしまいます。

そうしてつぎの日、フリートリッヒ駅で山田を迎えたのは紳士と貸切の一等車。

王侯貴族でもないのにこんな贅沢をと驚きを隠せない山田に、紳士は「あなたがそう率直なのに、私が遠慮するのは騎士道にはずれる…」と、おもむろに一冊の本をとりだします。

ここまできたらおわかりだろう…いやおわかりじゃないかもしれないけどまあなんとなくふんわり予想はおつきでしょう…たぶん。つまり要するにあれです。あれ。本文中のことばを借りるなら「旧約聖書にある、ソドム・ゴモラの悪習そのままを描いてある」ご本をさしだされ、しかも一等車まるまる貸切すなわち近隣に人影ゼロという状況、青年山田（女子方面にたいへんお盛ん）絶体絶命の大ピンチ。

大ピンチ、なのですが、しかしながら芸術の道を志そうという男はやはりひと味がう。

人間研究にまたない機会、とことんまでつきあってみようじゃないかと決意をかためた青年山田、紳士に向かってこう云いはなちます。

「あなたのような人には、今はじめてお会いするので、私はいま何も申し上げ得ない。（略）私という男性を、一つあなたの愛で女性にして見てご覧なさい。もっとも、女性になったが最後、あなたは捨ててしまわれるでしょうが…」

かっこいい！ こうさくかっこいい！！

惚れてまうやろ！

ということでこの後、ふたりのヨーロッパ旅行が始まるのですがまたこれがすごい。

旅の宿はフランクフルト郊外の療養院。といっても豪華なことサヴォイにもひけをとらぬ如しの、なかでも特等の一室に、山田は日本の富豪の息子、紳士はその秘書というふれこみで逗留することに。もちろん山田はなにも知らされず、すべては紳士のお膳立て。

しかしながらうまれながらの人徳というべきか、異国にありながらも傑出した音楽の才は人心をつかむに足るのか、療養所のセレブたちは老いも若きもこぞって山田に陥落、そのため紳士は嫉妬に燃え（自分がお膳立てしたのに...）、山田が婦人と散歩に出ようものなら十分もたたぬうちに追いかけてきてとりもどす。

「若御主人、健康に御留意願います。お父さまへの責任上御注意申しあげます。一では奥さま御無礼を！」

ちなみに青年山田のお父上はこの当時すでに泉下のひとです。いいけど。

その後ふたりきりになると「恋知らぬ乙女に言い寄る青年」のように哀訴懇願に暮れる紳士...
けして強引なことはしないと誓いながらもやはり心身御しかねるときもあるのか山田青年にあやしげな薬をすすめてはむげに断られる紳士...

ときおりそうした激情に駆られるほかは、芸術、学問、経済、政治すべてに通暁し、贅のかぎりを尽すだけの財と技量をもち、風貌も立派な紳士...

知ってる。

わたしこういうのなんか知ってる。

ビーとかエルとか頭につくやつ、しかももっとも華々しい系の作品、なんかこんな感じだ
って、わたし知ってる...

脳内にあかとんぼのあの字もおもいだせなくなりながら紳士と若き芸術家のめくるめく恋の鞘当を鑑賞することしばし。

キョルン、ボン、ローライと続く旅のさなか、やがて青年山田はある思いがおのれの胸にきざしかけていることに気づきます。

そしてそのため、山田はこの奇妙な旅を終わらせることを決意する。

「あなたはとうとう僕を女にして終いましたね、あなたの嫌いなきらいな女に...」

そう紳士に云いのこし、ひとり帰途に着く山田。

ベルリンには美しき娘が彼との婚約を待っている...（て突然の設定だけどほんと最後の最後でいきなりだされてびっくりしたのでそのままお伝えしてみたよ...）

ていう、ビーエルでした。

ここには詳しく書きませんでした山田さんと紳士の旅行中のいちゃいちゃとか結構ほんとうに90年代ビーエルかっていうくらいすごいのでよろしければどうぞご覧になってみてください。

あと紳士とはべつに、中学生時代のあれこれとか音楽学校時代のあれこれとかもけっこうすご

いです。

昔っていまよりなんかすごいなあって、...すごいなあっておもいます。

おどろくほど語彙のすくない表現になってしまいましたが、いや、なんか、すごいよ。ほんとすごいよ。

読後、音楽の教科書を正視しにくくなるかよけいにまじまじとみつめてしまうかおそらくどちらかと推察される作品。もうこの歳になったら音楽の教科書なんぞ身近にないとかそういうことは置いといて。

めくるめく山田ラブソディ、どうぞみなさまご一見を。

こどものひみつ、大人の秘密

広瀬寿子という作家とその作品に出会ったのはいまからたぶん10年ほどまえのことでした。『風になった忍者』という物語に出てくる少年たちのいきいきとした姿に、そして作品自体に漂うどことないさびしさに、これはとても好みの世界を描くひとだ！とおもい、それから広瀬寿子のなまえを図書館でさがすようになりました。

地元の図書館には『まぼろしの忍者』、『そして、カエルはとぶ！』というような作品がいくつかあって、でも奥付の作者紹介を見るにどうもこの作家はそんなに年に何冊も量産されるかたではないけども児童文学者としてのキャリアがだいぶ長くていらしゃるのでたくさんご著書があるらしい、でも古いせいかがものがみつからないとやきもきしてたときにたまたま司書講習で九州のある大学に通うこととなり、それがきっかけでその県にあるおおきな図書館にもいくようになり、そこで児童書コーナーにいったらば未読の廣瀬作品がたくさんあって喜びいさんだ次第です。

『小さなジュンのすてきな友だち』とか、『風のむこうの小さな家』とか、たくさん作品を読みました。ちなみにわたし2016年1月現在、広瀬寿子先生の書かれた作品で単行本が出ているものは絶版もふくめてぜんぶ読んでるはずです。

このかたの作品に漂う理知的な雰囲気も、登場人物たちのどこかにあるよるべなさも、それでいてひとを信じるための心はきちんとあるようなところも、わたしはほんとうにすきです。

鼻眞目を抜きにしてもあまりおなまえを頻繁に聞く作家さんではないような気がします、マイフェイバリット日本児童文学者トップ3にはいるとおもう。中澤晶子さん、三田村信行さんなどがほかにはおりますがそれはともかく。

で、前置きが長くなりましたがとにかくわたしはこのかたの描かれるものがとてもすきでみなさん読まれたらいいとおもっていて読まれるためには作品が売れるのが一番でだからつまりそのための糸口をご紹介できたらいいなとおもうのですよね。

で、当パブーの前3回のテイストはあんな感じですよ。なにとは申しあげませんがあのとおりですよ。

ということでおわかりでしょう、いまからお伝えしたいのはそういうことです。

縷々と語ってきました広瀬寿子作品の特徴のうちまだご説明していないこと、それは殿方同士の仲が親密ということにあります。

広瀬先生についてあまり詳細なプロフィールを見たことないんですけど1937年におうまれということなので昨今流行りのポイントにわざとストライク投げてらっしゃるわけではないのかなと勝手ながら推察したりもするんですけど、いやしかしときどきほんとうに広瀬先生そこらへのBLそのこのけの作品を書かれるのですよね。

びっくりするよね。

という前ふりとともに、それではご紹介いたします。

『秘密のゴンズイクラブ』。

発行は2011年なので本屋さんにも図書館にもばりばり現役であるんじゃないでしょうか。

児童文学です。

ちゃんとしたオーソドックスなみんなだいすき少年のひと夏の物語です。

『ふたりのイーダ』、『十一月の扉』、『霧のむこうのふしぎな町』、はたまた『トムは真夜中の庭で』、『クローディアのひみつ』、そうした名作の系譜の日本平成部門に置いてしかるべき作品です。

...主人公の僕のおとうさんとそのともだちにさえ注目しなければ。

しなければ...

ということであらずじをば。

小学生のトールは父の仕事の都合により、夏休みのあいだ父の友人のもとに預けられることになる。

やってきたのは霧の立ちこめる古い城下町。そこで出会ったキツネ、小ブネと名乗るふしぎな少年たち。トールは彼らのつくる秘密結社「ゴンズイクラブ」のメンバーとなる。やがて、町に高速道路ができるという計画が聞こえてきて...

というような。

このトールくんも秘密結社のみなさんもいきいきとしてかわいいのですが今回はおいておきます。

問題はさきほども申しあげたとおり、トール父とその友人宮野さんです。

まず物語の発端からですね、もうまずそこからなんですけど、いやほんとそういう目で見たら1ページにひとつつっこみどころがあるんじゃないかってくらいなんですけどとりあえず順を追って話すとしましょうか。

トールくんちは父ひとり子ひとりであり仕事で家をあけることの多い父はいつもならお姉さんを頼るのですがそのお姉さん、トールくんにとっては伯母さんが外国に行くことになったので父は息子の預け先をさがしていたとのこと。そして父がむかし暮らした城下町にいまも住む宮野さんに白羽の矢が立ったと。とはいえこの宮野さんとトール父、25年間会ってなくて連絡もしてなくてなのにいきなりおさない息子を預けるし預かるというふしぎさ。

そして件のトール父、フリーの写真家でわりとイケメンでガキ大将がそのままおとなになったようなひと。たぶんどんなどこでも生活できるアクティブさをお持ちだしいたいのことはなんとかなるしなんとかするタイプだし仕事や自分のことにかまけて基本家族やまわりをかえりみないように見えるのに意外と気遣いわすれないなんていうこにらしい男前。言っちゃえば旦那力すごい低いけど彼氏力すごい高いというアレです。

対する宮野さんといえば小柄でおとなしくて眼鏡で独身で料理できなくてごはんなんか小学生のトールくんにつくってもらってよろこぶし風邪ひいてはトールくんに見病してもらったりするような手のかかるひとだしなのに考古学研究所勤務のインテリ。5年まえに失踪したおじいさんの残した古い日本家屋にひとりでひっそりと住んでいる。

...しょうじき広瀬先生なんでそんな設定にしちゃったのっておもいましたよね。

ほんとにね。

まぼろしの忍者とか風になった忍者とかもうすうすそんな匂いしてたけどここまでドストライ

クくるとむしろ爽快でしたよね。

少年のひと夏の冒険譚として読むもよし、おとなふたりの秘密の物語として読むもよし、ちなみに申しあげますと挿絵はサッカー選手を女子的目線できゃーきゃーということで定評のあるスポーツ雑誌にてよくお見かけするイラストレーターのかたです。それぞれの登場人物の描写はアニメ風でもなくかといって写実にすぎるわけでもなくとても...とてもいい塩梅です...こんなとこまでぬかりない。編集者のかたの差し金をうたがっていいですかありがとうございます、とてもありがとうございます...

その手の雰囲気をかもしだす児童文学っていくつかありますがここまでサブストーリーが気になる作品はわたしいままで散見したなかにございませんでした。そして計算してみるに広瀬先生がこれを書かれたのは推定70代の頃なのでいや決めつけはよくないけども狙ったあざとさとかたぶんないんじゃないかなろうかというはずなのになんでこんなことにといいそ困惑している...。狙わないからこそその直球で受け取り手にはきついんですよね。養殖に慣れてた舌は天然ものの到来にびっくりしちゃいますよね。しかもキャリアン十年の筆力で。とかいろいろひっくるめて物語にノックアウトされてみるのはいかがでしょうか。わたしこの作品のなかに描かれるおとなたちの物語、たとえば草間さかえの漫画にあってもおかしくないとおもってる。

そして願わくば、広瀬寿子先生の文業がもっと世に知らしめられますように。

たとえば『秘密のゴンズイクラブ』と同時期に発表された『うさぎの庭』は、自分のきもちをうまく話せずともだちはうさぎのチイコだけという少年が古い洋館に住むおばあさんと出会ったことですこしずつ変わっていくというもので、わたしは、読んだあとこれはとてもだいじな作品だなあとおもいました。

ということで、よろしければどうぞお読みに。

そしてよかったらわたしと語りあってください。

こどものころから、本に描かれた世界を自分の規範にしてきました。

秘密の花園にあこがれ、八犬伝に胸おどらせ、彼らの正義やら倫理観やらに影響を受けてきました。

たぶんどこにでもいるような、本が好きなこどもでした。

そうして中学生になったとき、自分の足の骨がうまいことひっついていない、走ることのできない身だと知りました。

それまでも走っているつもりだったけども、そんなつもりだったのは本人だけで、まわりはわたしの渾身の走りを徒歩だとおもっていたそうです。

まじかよ

って感じですがまあそれはそれとして、それから本を読んで暮らしていて、そんであるときはたと気づいた。

世のなかの本に出てくるひとたちって健常者ばかりだね？

それはそれでいいんだけども、こと自分の身体的特徴に関するかぎり規範にできるようなキャラクターや物語ってそういえばないなあとおもいました。

たとえばわたしは小学校低学年から仁木悦子が好きで、仁木先生といえば脊椎カリエスで車椅子生活をなさって、でも描かれるキャラクターたちはほとんど健常者だし。

いろいろなおきもちがあるのだろうから読者からなにかを言うことはできないんだけども、障害のあるキャラクターががんばる作品読めたらわたし真似してめっちゃがんばるねんけどなと中二的なことをおもっておりました。

それから十年近くが経って、たまたま手にしたのがサトクリフ『第九軍団のワシ』だったわけです。

ゲド戦記やナルニアが好きなのにそういえばサトクリフ読んだことないわーとおもって読んでみたところ、作品のなかに出てくる、足を悪くした主人公マーカスの言葉に衝撃を受けました。

「もし任務を果たすために駆けなくてはならないとなったら、わたしの足はたしかに重荷になるでしょう。それは認めます。だが、いずれにせよ、馴れない国では、あくせくしたってはじまらないではありませんか。」

あ、これはわたしの物語だ、この言葉の重さはいわゆる「健常者」にはわからないだろう、と、そのときおもいました。

物語をわたしのものだとおもいこむというのはけっこうだれもがやってることかもしれないけれども、このときははじめてよっしゃーこれはおれのもんだーとおもった。

ローズマリ・サトクリフが車椅子生活をされていたということを知ったのはだいぶあとのことでした。

また、いま言ったような点はさておくとしても、たとえば上橋菜穂子さんや荻原規子さんといった日本児童文学に名だたるかたがたが愛してやまないとおっしゃるサトクリフ作品。

ケルトやアイルランドやローマン・ブリテン四部作やアーサー王やといった歴史的題材を元に描かれる物語の数々は多くの読者を魅了しておりということでまあそこらへんは語るまでもないとおもうんですけど、ということでそろそろおもいだしますねこの文章のそもそもの意義。

『第九軍団のワシ』もそうなんですけど、サトクリフ先生ったらすごく、すごく、...少年同士とかおっさんと少年とかそういう組み合わせがお上手なんですよね...

またヒロインにしてもきらきらしてるばかりで役に立たない美少女なんてものはほとんど出てこなくて、医術にめっちゃ長けてるがんばり屋さんとか暗くてちょっと卑屈でちっぽけで美少女でもなくてでもきらりと光るところがあるとか、そういう、とても、ともだちになりたいタイプの女子が多いのですきです。

ということでサトクリフはほんとさまざまな意味でたまらないわね...とおもいながら読んでいるのですが、先日手にした作品がなかでもとりわけてどんぴしゃだったのでご紹介いたします。前ふりだいぶ長かった。

ということで今回のお題はローズマリ・サトクリフ『ケルトとローマの息子』。

ときは紀元2世紀。

嵐の夜、ケルトの村の浜辺に打ち寄せられたローマの難破船からひとりの赤ん坊がみつかった。族長の弟であるクノリの妻はそのころこどもを亡くしたばかりだった。妻をなくさめるため、クノリはドルイド神官の反対を押し切り赤ん坊を自分の養い子とする。

赤ん坊はベリックと名づけられすくすくと成長した。しかしベリックが成人を迎えて間もなく、村は次々と災厄に見舞われる。災いの元だとされたベリックは村を追放され、旅の途中で知り合った男に騙され売り飛ばされ奴隷となり、脱走してガレー船の漕ぎ手となり、そこから逃亡してローマの百人隊長のもとにかくまわれることになるのですが、あまりにも波瀾万丈すぎて頁を繰る手がとまらないのとあとゆくさきぎきで出会うひとびととベリックのあいだがなんていうかあれなんでみなさんおすきな組み合わせがあるんだろうな...とおもってしまったので以下に記します。

わたしの考えすぎかしら。どうかしら。

まずケルトの村で兄弟のように育った一歳上のカスラン。

はじめは村でひとりだけ外見のちがう（ローマ人だからね）ベリックをばかにしたりからかったり、でもベリックが反抗して取っ組み合いのけんかをしたことでその後大の親友に。

部族のあいだで過ごすうち無二の親友ができるってパターンも多いねサトクリフ...ちくま文庫版で「ケルトとローマの息子」と同時収録の「ケルトの白馬」もわりとそんな感じ。

それから奴隷にいったさきの主人の息子グラウクス。

美少年で傲慢で金持ちを嵩にきていて癩癩もち、ベリックを苛みいたぶりはては自分の奴隷にしてヒュアキントスとなまえまで変えさせる。

なおグラウクスの妹のルキルラは容貌の点では兄にはかなわないけどとてもいい子でベリックを奴隷というよりともだちのように扱う。それがまたグラウクスには気に食わない。

70年代JUNEパターンだな...っておもってごめんなさい。

それからガレー船で漕ぎ手のペアを組んだイアソン。

画家志望だったところがうっかり賭博にはまって奴隷となってしまった青年。

苦境に負けないやさしさの持ち主。いろいろあってめっちゃめっちゃひねこびてしまったベリックの心を癒したいやつ。

物語のおもしろさもさることながら、いろいろな意味で盛りだくさんだわ...なんなのこの遍歴...とおもって読みすすめていたら、最後の最後でさらに上をいく存在があらわれたのでちょっとどうしたらいいのかわからなくなりました。

このひとです。

酸鼻を極める暴虐を受けた果てにガレー船から捨てられたベリック。

たどりついた牧場の主は、かつてグラウクスの暴力からベリックを守ろうとしたローマの百人隊長ユスティニウスだった。

寡黙で実直なユスティニウス、また牧場を切り盛りするセルヴィウスとコルダエラ夫妻にも優しく迎えられ、ベリックは次第に心をひらいていく。

そしてある日、ベリックはユスティニウスの秘密を知ることに――

という感じの流れなんですけどぜんぶ言っちゃうとつまらないのでよろしければこの先はどうぞみなさんの目でお確かめください。

おっさんと少年好きの方には最高の物語だとおもいます。

なんていうか壮大な...おっさんと少年の...ハーレクインロマンス的な...っておもっちゃってごめんなさい。

しょうじき言って嗜好にどストライクでした。

最高でした。

サトクリフ作品は緻密な歴史考証、圧倒的な物語の構成力、いきいきとした人物造型で高い評価を受けています。

そこに個人の感想をひっつけるのも恐縮ですが、ビーエルに近い読みかたや、あと、障害をもってうまれてきたからこそその身の処し方なんかも学べるという点も評価のうちにはいってればいいなとおもう次第です。

今回ちょっと自分の話多かったんであれですけども、とにかくサトクリフはいいよ！ っていう、お話でした。

ついでにいま読んでるマデリン・ミラー『アキレウスの歌』もギリシャ神話の世界を題材にしたガチビーエルなんですけどその紹介はまたいつか。

ギリシア神話を知っていますか

わたしはあんまり知りません。

ギリシャ神話とかローマ神話とか、最近になってようやくサトクリフ関連からすこしずつ知識を得ているようなそうでないような、というくらいであとはこどものころに読んだ世界少年少女名作全集（両親のこどものころに発行されたとても古いやつ）でかじったことがあるくらいだわ...って感じだったのですが、先日とある女優さんの読書エッセイを読んでいたらなんだかちょっとセンサーにひっかかるものが出てきたので読んでみました。

センサーが何の方向に向いているのかは言わずもがな。

ということで今回のお題。

マデリン・ミラー『アキレウスの歌』。

日本語版は川副智子訳・早川書房より刊行。

作者はマサチューセッツ州ケンブリッジ在住、ラテン語・ギリシャ語・シェイクスピア等が専門の高校教師。

デビュー作の本書は、2011年、その年イギリスで刊行された女性作家の長編小説でもっともすぐれたものに贈られる文学賞オレンジ賞を受賞。

かのJ・K・ローリングが賞賛したことでも知られ、世界23カ国で翻訳される。

という華々しい評価を得た全世界的ベストセラーだそうです。

なんですけども。

物語の語り手は「王家の血筋を引く王」メノイティオスの子パトロクロス。

富家に育った母は、赤ん坊のパトロクロスとその寝所から連れ去り枕とすりかえても気づかない「頭の悪い女」だった。

母の出自、またおないどしの子らにくらべて発育もよくなかったパトロクロスは父に疎まれ、みなから侮られ、孤独な日々を送る。

そしてある日、パトロクロスはつまらない諍いから有力貴族の息子を殺してしまう。

追放の身となったパトロクロスは小国プティアの王宮に身を寄せ、そこでペレウス王の息子アキレウスと出会う。

女神テティスを母にもつ半神アキレウスは金髪緑眼の比類なき美少年、武術に優れ、光を一身に受けて育ったような性質は王宮のだれもから愛されていた。

自分とはまったく違う相手に反発と劣等感をもつパトロクロス。しかしアキレウスは数多い取り巻きの少年たちのなかからパトロクロスに従士を選ぶ。

というのがふたりの出会いです。

厳密に言うとパトロクロスはこどものころにアキレウスを見かけていますがそれはまあ置いて。

王道だな...とおもったのわたしだけじゃないとおもうのですがどうでしょうか。

周囲からふしぎがられるアンバランスな組み合わせながら、仲むつまじく日々を過ごすふたり。

そして十三歳のある日、パトロクロスは自分のなかにアキレウスへの友情を越えた思いがあることに気づきます。

しょうじきに言うとなし、ひとさまのエッセイでセンサーにはひっかかったもののいつもの火のないところにちょっとした煙を感じとってみようかなくらいのきもちで読んでたんでこのくだりにかかったときびっくりした。

ものすごいびっくりした。

そんで何度も文章を読み返したんですけどやっぱりなにかめばえてた。パトロクロスすごい本気だった。

といってもやっぱりわたしの頭には、先に書いたような華々しい受賞歴やら世界的ベストセラーやらローリング絶賛やら読書好きで知られる女優さんのエッセイに出てくるやらの前評判のイメージがこびりつきすぎていて、無邪気なアキレウスがパトロクロスの鼻に自分の鼻をこすりつけようと唇と唇を髪の毛一本へだててひっつけようと（読み終わっただけであらためて考えるとこのときこの所業に耐えたパトロクロスめっちゃえらいとおもう）いや、でもそこまで決定的じゃないよな思春期の一過性のなんとかっていう保健体育の教科書によく出てくるようなあれっていうオチなんでしょ期待するとあとでがっかりしちゃうわよおちついてと

おもっていたのが間違いだったと読み終わっただけで痛切に感じている。

油断してた。

全世界ベストセラーが、すてき女優さんが「感動しました！」って書いてらっしゃる歴史的マンガが、こんなに濃厚な一線越えかましてくるなんておもってもみなかった。

全世界ベストセラーか...そりゃもう全世界のシスターたちがお読みになったんだろな...何のシスターとは言わないけど強いな...世界23カ国か...めっちゃ強いな...と遠い目になることしばしでした。

ほんとすごかった。

ということでその後のあらすじなんですけど。

テティスの導きにより、アキレウスはケンタウロスのケイロンに教えを請うべく山に入る。三年後、遠きスパルタの地で美女ヘレネが宮殿から連れ去られた。それをきっかけにギリシアとトロイアの間で戦端が開かれ、参戦を請う声にしたがってアキレウスはトロイアへと向かうこととなる。

アキレウスのそばには常にパトロクロスがいた。ときにテティスに引き離され、ときに周囲の女たちの声からめとられながらも、ふたりは互いへの思いを貫く。

しかし神々から「無名のまま長生きするか、若くして榮譽に死ぬか」の選択を迫られた果てに

榮譽を選んだアキレウスの命はいつ絶えるとも知れない。

戦争は長期にわたり、総大将アガムメノンの暴虐とアキレウスに対する嫉妬も深まっていく。やがてアガムメノンとアキレウスの間の亀裂を決定的にする出来事が起こり、アキレウスの命と名誉を案ずるパトロクロスは一計に出る…。

という、ストーリーの合間合間にはさまれるふたりの仲むつまじさ。

むつまじさっていうか。

ギリシャの少年愛がどうのこうのという知識は頭のどこかにあったはずですけども、なんでもいまの観点からあれこれ考えるのはちょっと違うのかもしれないけども、このひとたち少年期どころかだいたいおないどしでアラサーになるまでおんなじベッドでいちゃいちゃしてるからね…

ギリシャ神話随一の「駿足」で槍をもったら一騎当千、太陽のような気性、金髪緑眼の神にも見まがう美貌の少年がただひとり愛したのが、文武ともにぱっとせずケイロンの指導あって医術には長けているものの容貌は「宮中の女たちが笑っている」というタイプのぱっとしないおさななじみという…

戦場に出ればほとんど役にたたないパトロクロスを守るように敵を蹴散らしていくアキレウス、夜ともなれば「猫のような小ずるいまなざしで」パトロクロスを誘うアキレウス、アガムメノンの奴隷にされるところを救った美女ブリセイスにつつましく慕われながらもアキレウスを裏切れず拒むパトロクロス…

こういうの見たことある、わたしがまだ小学生だったころ図書館にあってよくわからないまま読んだかどかわルビー文庫とか長じて読んだJUNEとかあと自分たちよりちょっとだけ上の世代のかたがたが書かれた二次創作のうちシリアスで壮大なタイプのあれこれによく出てくるやつや

とおもってたら作者のマデリン・ミラーさんは1978年うまれでいらした。

やっぱりな

イギリスと日本、遠く国を隔てているとはいえきっと流れるソウルはおなじなんだろうなとおもいました。

洋画のこともドラマのこともよく知らないけどいま海外シスターたちのスラッシュサイトがすごって噂で聞いたことがあるし絶対こういう流れは万国共通なんだな…ってギリシャの狭い規模のなかでの国同士の戦争を描いた小説で納得してしまうのだからなんだかこう、こういうの世界平和の一助にならないかしら。どうかしら。

ほんとうにこってこてでした。

ひさしぶりにこういうの読んだ。

ふだん火のついてない七輪をあおいでは昔むかしに焼いためぎしの煙の残り香を嗅ぎそのうまさに思いを馳せているひとがいきなり高脂肪高カロリーのデコレーションケーキをワンホール食べたらいまのわたしのようなきもちになるとおもいます。

そんな感じです。

アキレウスとパトロクロスの関係にのみ重点を置いて語ってきましたが、さすがに構想10年の大作にしてオレンジ賞受賞作、日本語版にして485ページという大冊ですが息をつかせぬ展開でぐいぐい読ませます。

とくに後半にかかってくるとページを繰る手が止まらない迫力。

あと、話を蒸し返しますとアキレウスとパトロクロスのゆくすえもほんと...ほんとうこういうの万国共通なんだなって...いえ何とは申しませんが共通なんだなって...

まあわりと多くのひとがそうかもしれないんですけど、あらすじに書いていなくてもたぶん察していただけるかとおもいますが、人物のなまえがときどきよくわからなくなるのはご愛嬌

。

アガムメノンとかアキレウスとかオデュッセイウスとかなんかどっかで聞いたことあるひとびとならともかく、ろくに知識のない身では語りでのパトロクロスさえときどきだれだっけみたいなきもちになりました。

片仮名むつかしい。

ギリシャ神話はとっつきわるいわとおもってらっしゃるかたもそうでないかたも、よろしければどうぞひとつ。

いろいろな角度から楽しめる一冊です。